

八代集における「こころ」の表現と心の構築 — 空間化・実体化比喩を中心に —

鳥越 隆士[†]

The Expression and Construction of Mind in Hachi-Dai-Shu
Focusing on Spatialization and Substantiation Analogies

Takashi Torigoe

1. はじめに

紀貫之は『古今和歌集』[1]仮名序で、「やまとうたは人の心を種としてよろづの言の葉とぞなれりける」と述べ、和歌詠出の根底に心があるとした。また藤原定家は、「情(こころ)は新しきを以て先となし、詞は旧きを以て用ゆべし」[2]と、使用される言葉に制限を加えた一方、表現される心は多様に発展していくべきと述べた。

詞に関しては、枕詞、掛詞、縁語、見立てなど、様々に整理、分析されてきた。それに対し、和歌詠出の起点として位置づけられている心はどのように捉えられ、理解されてきたのであろうか。また『古今和歌集』以来、定家の言う「新しい心」がどのように和歌の中に創出され、展開してきたのだろうか。本論文では、「こころ」という語に着目し、その表現の拡がりを分析・検討したい。

2. 「こころ」の表現に関する先行研究

神田洋[3]は『古今和歌集』の「こころ」の用例を抽出し、4つのグループに分類した。「歌の情趣のようなもの」、「人への思い、あるいはこうしようという意志のようなもの」、「情感として、あるいは客観的に単にこころ」、「浮遊する心」である。肉体から離れ「浮遊する心」は、魂的な意味を担っており、上代にまで遡ることのできる「古代の心」とした。ただこの論文では、「浮遊する心」についての検討のみであり、それ以外の心の表現の詳細な検討はない。

これ以降では、「心のすゑ」(院政期和歌、樺沢綾[4])や「心の闇」(八代集、佐藤雅代[5])など、心を含む表現の分析や「こころ」と他の語との関連、例えば、「身」との関わりで「こころ」の表現を論じた研究がある(古今集、高木和子[6]、紫式部、和泉式部の和歌、野村精一[7]、新古今和歌集、坂野みづえ[8])。これらの研究で「こ

ころ」の表現の一側面は明らかになったが、網羅的な分析がなされておらず、「こころ」の表現の全体像を明らかにするまでには至っていない。また「こころ」に関わる表現が分析されたとしても、そもそも心がどのように捉えられてきたか、言わば心の構築に関する視点が欠落している。

心がどのように捉えられているか、心の構築という観点から踏み込んだ研究として半沢幹一の研究[9]ある。比喩の観点から『万葉集』と八代集で「こころ」の表現を検討した。まず『万葉集』の「心のうち」の表現を取り上げ、「うち」が空間に関わる言葉であり、その表現に心の空間的なイメージを喚起させていると指摘した。さらに八代集における用例を検討し、「心のうち」の用例が増加するだけでなく、「心の闇」、「心の隈」、「心の底」、「心の奥」等、新たな空間化表現の創出や空間化を前提とする形容詞(「心の深さ」、「浅き心」、「長き心」、「心広し」等)の表現が多様に展開していることを示した。また「身」と「心」がともに詠みこまれている歌を取り上げ、万葉集が3首であったのに対して、以降の八代集で多く見られるようになり、身との対比を通して心が比喩化されていることを示した。これらのことから万葉集から八代集の間に、心に関して現実世界からそれとは異なる比喩世界の設定が意図的になされたと結論づけている。ただ万葉集との比較対照はあるものの、八代集内でどのように変遷してきたのか、和歌史的な検討がなされていない。

そこで本研究では、まず『古今和歌集』を対象として、「こころ」の用例を抽出し、個々の歌の中で、「こころ」がどのように表現されているのか、またその背景としてそもそもどのように心が捉えられているのかを明らかにする。さらにそれらが時代とともにどのように変遷してきたのか、八代集を対象に和歌史的検討[10]を試みたい。

[†]2023年度修了(人文学プログラム)

3.『古今和歌集』における「こころ」の表現

3.1 用例の抽出と分類

本研究では、「こころ」の表現の和歌史的検討の出発点として、まず『古今和歌集』歌の「こころ」の表現の網羅的な分析を行った。『古今和歌集』で「こころ」の語が用いられている和歌を抽出した。全部で124首あった。全歌(1111首)のおよそ11%に当たる。「こころ」の語が用いられている124首の和歌（うち3首は長歌であり、分析対象外とした）を質的に分析した[11]。一つ一つの和歌で用いられている「こころ」の形式（複合語や定型句を形成しているかなど）や表していると思われる意味等により分類を試みた。その結果、大きく5つのグループに分けることができた。(1)慣用的、定型的な表現(19首)、(2)心の働きの一部に焦点化した表現(17首)、(3)心全体を対象とした表現(38首)、(4)景と関連づけた比喩的な表現(41首)、(5)擬人的表現(6首)である。

第1グループは、「こころみる」(377, 518, 568, 750, 1025, 数字は歌番号を示す)、「こころづから」(85)など、「こころ」の慣用的、定型的表現であり、「こころ」の語そのものの担う意味が縮小していると考えられる。第2グループは、「またく心」(1014),「まどふ心」(597)など、多くの場合心情語を用いて、心の一部の働きを表現するものである。感情や気持ちが心情語で表され、この場合も「こころ」の意味そのものは縮小していると言えよう。心の働きの一部を、第4グループは景の特徴と重ね合わせて（例えば、花の色がうつろうように恋心もうつろう、797）、第5グループは本来心を持たない動植物や自然現象の特徴に重ね合わせて（桜に心があれば墨染めに咲いて欲しい、832）表現しようとするものである。いずれも心の働きの一部に言及するものであり、心全体を捉えて表現するものではない。これらに対して、第3グループは、心全体を対象として捉え、表現しようとするものである。その背景に心をどのように捉えているのかが想定でき、ここから心の構築の手がかりを得ることができるだろう。したがって、本論文では、以下、第3グループの用例のみを取り上げて分析を進める。

第3グループの「こころ」は、心全体を対象として表現しているものであるが、心は捉えどころのないものであり、比喩が有効な手段として用いられる[12]。用いられた比喩によって、このグループはさらに2つのサブグループに分かれた。一つは心を空間的な拡がりのあるもの、あるいは空間をもつ容れ物のようなものとして表現しているもの（「心の空間化」とする、14例）、もう一つは、心を実体あるものとして、あるいは他物と対比したり、数えたりすることができる個物のようなものとして表現しているもの（「心の実体化」とする、24例）である。

3.2 心の空間化

まず心の空間化の用例を以下に示す。

かきくらす心の間にまどひにき夢うつつとは世人定めよ
(646)

思ふてふ人の心の隈ごとに立ち隠れつつ見るよしもがな
(1038)

「闇のような心の中でまどう」(646),「入れ物のように存在する心の隅に人が立ち隠れる」(1038)と表現し、心そのものを空間的な拡がりのあるものと捉えようとしている。

空間的な拡がりをもつ心はまた様々な事象が現れる場でもある。

限りなき雲みのよそに別るとも人を心におくらさむやは
(367)

秋霧の晴るる時なき心には立ちゐのそらも思ほえなくに
(580)

かく恋ひむものとは我也思ひにき心の占ぞまさしかりける
(700)

我が袖にまだき時雨の降りぬるは君が心に秋や来ぬらむ
(763)

「あなたを私の心の中に置いたり」(367),「心の中で秋霧が晴れなかつたり」(580),「心の中で占いが行われたり」(700),「あなたの心の中に秋がやってきたり」(763)している。

空間的な心はまたその外部と対比させて捉えることもできよう。内面としての心であり、それはまた外から見えない心でもある。

人はいさ心も知らずふるさとは花ぞ昔の香にほひける
(42)

思ひせく心の内の滝なれば落つとは見れど音の聞こえぬ
(107)

かたちこそみ山隠れの朽木なれ心は花になさばなりなん
(875)

人知れず思ふ心は春霞立ち出でて君が目にも見えなむ
(999)

107歌は「心の内」、42歌、999歌は「人は知らず」「人知れず」と外から見えない心を表現している。875歌は、外から見える「朽ち木」のような姿に対して華やかな心が内側にあると表現している。

外から見えない心を外に現れる言葉と対比して表現することもできる。

相坂の闇の流るる石清水言はで心に思いこそすれ (537)
いで人は言のみぞよき月草のうつしこは色異にして
(711)

時雨つつもみづるよりも言の葉の心の秋にあふぞわびしき
(820)

いずれも外に現れる言葉と対比させて内にある心を表現しようとしていると言えるだろう。

3.3 心の実体化

まず心がどのようなものと考えられるか、言葉で説明的に捉えようとする表現がある。

心をぞわりなき物と思ひぬる見るものからや恋しかるべき

(685)

捉えどころのない心を「わりなき物」として言葉で具体的に捉えようとしている歌である。このように心を言葉で説明し、理解しようとする用例は一例のみであった。捉えどころのない心を実体的なモノとして考え、比喩的に理解しようとする用例を以下に示す。

まず心を個物として捉え、複数個想定して、それらを対比させて心を理解しようとする表現があった。「もとの心」(219, 886, 887) という表現では過去と現在の心を対比させていた。

秋萩の古枝に咲ける花見ればもとの心は忘れざりけり

(219)

石上ふるから小野のもと柏もとの心は忘られなくに

(886)

いにしへの野中の清水ぬるけれどもとの心を知る人ぞ汲む

(887)

いにしへになほ立ちかへる心かな恋しきことに物忘れせで

(734)

初めの三首はいずれも現在の心と対比させ、過去の心(「もとの心」)に焦点化させている。734歌の「立ちかへる心」も過去の心に焦点化させている点で共通していると言えよう。

対比は、自分の心と他者の心の間でも可能だろう。

心かへするものにもが片恋は苦しきものと人に知らせむ

(540)

540歌では、「自分の心と他者の心を取り換えて、苦しさをあなたに知らせよう」と表現している。

心の実体化では、また心とそれ以外のものを対比させることにより、心の様相を表現しようとする。典型的には「身」との対比である。以下にいくつか用例を示す。

よるべなみ身をこそ遠くへだてつれ心は君がかけとなり

(619)

身を捨ててゆきやしにけむ思ふよりほかなるものは心なりけり

(977)

白雪のともに我が身はふりぬれど心は消えぬ物にぞありける

(1065)

「身は遠く離れても心は影のようにあなたの近くにいる」(619), 「心は身を捨ててあなたのところに行ってしまった」(977) と、身から空間的に離れている心を表現しようとしている。また1065歌では、「身は年を取って変化(髪が白くなる)してきたが、心は変わらない」と、身と心の乖離が空間的なものだけでなく、時間的にも扱われている。

身が歌の中に明示されなくとも、心と身との乖離が読み取れる和歌もあった。

留むべき物とはなしにはかなくも散る花ごとにたぐふ心か

(132)

山高み雲ゐに見ゆる桜花心の行きて折らぬ日ぞなき

(358)

雲ゐにもかよふ心のおくれねば別ると人に見ゆばかりなり

(378)

白雲の八重にかさなる遠にても思はむ人に心隔つな

(380)

立ち帰りあはれとぞ思ふよそにても人に心をおきつ白浪

(474)

いずれにおいても「私の心は思う人(378, 380, 474)あるいは花(132, 358)の近くにいるが、身はそこから遠く離れている」と読み取ることができるだろう。

これら身から乖離する心の用例は、先に紹介した「浮遊する心」と共通する表現であろう。ただ「浮遊する心」では、肉体を離れ、コントロールできない心に焦点が当たっていたが、ここでは心が離れてしまった身(「よるべない身」, 「捨てられる身」, 「桜を見る(身)」, 「おくれねば別ると人に見ゆる(身)」)にも焦点をあてていることが特徴的であろう。

以上の和歌で表現される身と心は、作歌者のそれであったが、以下のように、これらとは異なる身と心の関係が表現される歌もあった。

たらちねの親のまもりとあひそふる心ばかりはせきなどめそ

(368)

わりなくも寝てもさめても恋しきか心をいづちやらば忘れむ

(570)

ふるさとにあらぬものから我がために人の心のあれて見ゆらむ

(741)

いづくにか世をば厭はむ心こそ野にも山にもまどふべらなれ

(947)

368歌では、身から離れるのは第三者(親)の心であり、741歌では、あなたの心が私から離れる。また570歌(「心をどこにやればあなたを忘れるができるのか」)と947歌(「心は野山にうろうろしている」)は、いずれも心は身から離れ、浮遊するものの特定の場所をめざしているのではない。

身と心が単に乖離しているだけでなく、身と心の上に主体を置き、両者を統合する視点を提示していると思われる歌もあった。

慕はれて来にし心の身にしあれば帰るさまには道もしら
れず
（389）

惜しむらく人の心を知らぬ間に秋の時雨と身ぞふりにけ
る
（398）

人を思ふ心は我にあらねばや身のまどふだに知られざる
らむ
（523）

身は捨てつ心をだにもはふらさじつひにはいかがなると
知るべく
（1064）

389歌では、あなたを慕って身も心もここに来たのに、帰る時には、茫然となって（帰る身からこのままここに居ようとする心が離れて）、主体である私は「帰るさまには道も知られず（帰り道もわからなくなっている）」と解釈できる。398歌は、人の心（私に対する恋心）と「身をふる」（私が年をとる、時が流れる）の間に「知らぬ間」（主体である私の認識）を介在させている。523歌では、あなたを思う心はもう自分の身から離れてしまっているが、その身も迷ってしまい、主体である私も「知られざるらむ（わからなくなってしまっている）」と解釈できよう。1064歌は、身（社会的な身分、役割等）を捨てたとしても、それに伴う心（これまで培ってきた経験や気持ち等）は捨てず、さらにこれから自分がどんなふうになっていくのか、主体である私が「知るべく（確かめたい）」と表現している。

これら4首においては、「知る」という動詞によって、主体としての「私」が指定されていた。ただこれら4首のうち3首の「知る」は否定形であり、結局主体である私は「知る」ことができず、戸惑いが表現されているのであるが、いずれにせよ、離れ離れになった身と心をより高い位置から認識（あるいは統御）しようとする主体を指定することは新たな人間理解の端緒を指し示していると言えるのではないだろうか。

3.4 小括

『古今和歌集』の「こころ」の用例を分析し、心の構築の分析的枠組みを導出した。その中で、本論文では、心全体を対象とした比喩的表現（「心の空間化」と「心の実体化」）に着目した。心の空間化は、空間的な拡がりを持つものあるいは空間をもつ容れ物のようなものに喩えて表現する。心が闇のようであったり、外面に対する内面と捉えられたりしたが、さらにその空間は様々な事象が現れる場であり、また外（外見、言葉など）と対比される内なる（外から見えない）場として捉えられていた。心の実体化は、心をモノとして捉えようとし、過去の心や他者の心と対比させたり、身と対比させたりして、心を表現しようとした。また単に身と心が分裂していることを表現するだけ

でなく、身と心より高い位置に主体を指定し、統合する視点を提示した歌もあった。

4. 「こころ」の表現の変遷

4.1 『古今和歌集』以降の用例の抽出と分類

『古今和歌集』の分析で明らかになった「こころ」の用法とその意味に関し、同様の枠組みで『古今和歌集』以降の八代集[13]で分析を行い、心に関わる表現、特に心の空間化と心の実体化がどのように変遷し、展開してきたかを明らかにする。

まず「こころ」の語を用いている和歌を各集から抽出し、抽出した和歌数と割合（母数は全和歌数）を算出した。『後撰和歌集』183首（13.0%）、『拾遺和歌集』134首（9.9%）、『後拾遺和歌集』146首（12.0%）、『金葉和歌集』72首（10.8%）、『詞花和歌集』54首（13.0%）、『千載和歌集』163首（12.7%）、『新古今和歌集』177首（8.9%）であった。多少の変動はあるものの、いずれも『古今和歌集』同様10%前後であった。このことから八代集を通して「こころ」の表現が重要な役割を担っていることがうかがわれる。

「こころ」の表現を『古今和歌集』で得られた分析的枠組みで分類した。第3グループに分類された和歌数と割合（母数は、「こころ」の語が用いられた和歌総数）は、『後撰和歌集』43首（23.5%）、『拾遺和歌集』29首（22.5%）、『後拾遺和歌集』39首（26.7%）、『金葉和歌集』18首（25.0%）、『詞花和歌集』18首（33.3%）、『千載和歌集』63首（38.2%）、『新古今和歌集』40首（23.0%）であった。いずれも20%以上あり、八代集を通じて、心全体を比喩的に捉え、表現しようとしていることがうかがえる。以下、それらの表現の変遷を、心の空間化と心の実体化に分けて詳述する。

4.2 心の空間化の変遷

『古今和歌集』以降に新たに加わった特徴を、以下、用例とともに示す。『古今和歌集』では、「心の闇」、「心の隅」、「心の内」などの表現が見られたが、以降の集でも同様の用法が見られた。新たに加わった語句は、「心の底」（千載、1149、新古今、792）、「心のはて」（千載、291、新古今、1766）、「心のそら」（新古今、1010、1978）、「心の奥」（新古今、1618）などであった。心に関わる新たな語句が『千載和歌集』、『新古今和歌集』で試みられたことが示された。

空間化に関連する形容詞や形容詞的表現（「深し」、「限りなし」）を用いて、以下のような表現が見られた。

八重葎心の内に深ければ花見にゆかむいでたちもせず
（後撰、140）
見えもせぬ深き心を語りては人に勝ちぬと思ふものかは
（後撰、1278）

天地の神ぞ知るらん君がため思ふ心の限りなければ
(拾遺, 659)
限りなく思ふ心の深ければつらきも知らぬものにぞあり
ける
(拾遺, 942)

三代集以降での新たな表現としては、「はてなき心」(後拾遺, 744), 「心広し」(金葉, 594) があった。

『古今和歌集』では、単に心を空間的に捉え表現するだけでなく、その心の場で起きていることを具体的に表現していた(あなたがいたり、霧が晴れなかつたり、秋がやつてきたりなど)。以降の集でも心の場で生じている情景を具体的に描くことにより、「こころ」の様相を多様に表現していた。

身に寒くあらぬ物からわびしきは人の心の嵐なりけり
(後撰, 1246)
晴れずのみものぞ悲しき秋霧は心のうちに立つやあるら
ん
(後拾遺, 293)
紅葉ゆへ心のうちにしめ結ひし山の高嶺は雪降りにけり
(後拾遺, 405)
千代を祈る心のうちにすずしきは絶えせぬ家の風にぞあ
りける
(後拾遺, 439)
世とともに心のうちにすむ月をありと知るこそ晴るるな
りけれ
(金葉, 642)
笠取の山の世をふる身にしあれば炭やきもをるわが心か
な
(金葉, 407)
山城の石田の森のいはずとも心のうちを照らせ月かけ
(詞花, 304)
月みればはるかに思ふ更科の山も心のうちにぞありける
(千載, 280)
山よりは深き所をたづね見ばわが心にぞ人はいるべき
(千載, 912)

以上の用例で、空間的拡がりを持つ心の中で、嵐が吹いたり、霧が立ったり、しめ結をしたり、風が吹いたり、月や山があったり、炭やきやあなたがいたりなど、比喩的に心の様相を具体的に表現していた。これらはある時点を切り取った心の様相の叙述と言えるが、さらに時間的経緯を含める和歌が『千載和歌集』以降見られた。

日のひかり月のかげとて照しける暗き心のやみ晴れよと
て
(千載, 1245)
闇はれて心のそらにすむ月は西の山辺や近くなるらん
(新古今, 1978)

千載1245歌は、「心の暗い闇が日のひかりによって晴れていく」、新古今1978歌は、「心の空が、闇から晴れ、さらに澄んだ月が西の山辺に近づいている」と、いずれもまたかも時間経緯を伴う物語のように、心の中で生じている事象の推移を具体的に叙述している。

心の内と外(外見や言葉)との対比的な表現は、『古今和歌集』で見られ、以降の集でも多く見られた。さらに『金葉和歌集』以降、新たな展開が見られた。心の内と外の間に「涙」を置く(あるいは心の外を涙で代表させる)表現である。

色見えぬ心ばかりはしづむれど涙はえこそしのばざりけ
れ
(金葉, 42)
帰るべき旅の別れとなぐさむる心にたがふ涙なりけり
(金葉, 336)
わびぬればしひて忘れむと思へども心よはくも落つるな
みだか
(詞花, 203)
人知れず思ひそめてし心こそいまは涙の色となりけれ
(千載, 687)
忍び音の袂は色に出でにけり心にも似ぬ我涙かな
(千載, 694)
しのぶるに心のひまはなけれどもなをもる物は涙なりけ
り
(新古今, 1037)

以下、内容を対比的に示すと、「しのぶ心(心の内)と外に現れる涙(心の外)」(金葉, 42), 「いずれ帰ってくだろうと自分を慰める心(心の内)にたがい、やはり別れは悲しいと涙する(心の外)」(金葉, 336), 「つらくてあなたを忘れようとする心(心の内)と弱くて忘れられず落ちる涙(心の外)」(詞花, 203), 「忍ぶ恋(心の内)が高じて涙の色(心の外)として外に現れてしまった」(千載, 687), 「忍ぶ恋(心の内)で声を忍んで泣いていたら、袂に涙の色(心の外)があらわれてしまった」(千載, 694), 「忍ぶ恋(心の内)が涙として漏れてしまった(心の外)」(新古今, 1037)である。

いずれも心の内は忍ぶ恋、心の外は涙(あるいは紅涙)であった。涙は身体の反応であり、のちに述べる心と身とを対比させる表現でもあると言えるが、他方、涙は心とも直結している。心(悲しいという気持ち)を原因として涙が外に現れると言えよう。ただ涙は受動的にふるまうのみでない。新たな心の構築が『千載和歌集』で試みられる。

恋しともいはぬに濡るる袂かな心を知るは涙なりけり
(千載, 662)
色見えぬ心のほどを知らするは袂を染むる涙なりけり
(千載, 688)

千載662歌は、「忍ぶ恋(心の内)を口に出さずにいたのが、それを涙が知って袂を濡らす(心の外)」、千載688歌は、「忍ぶ恋(心の内)の程度を知らせるのは涙の色の濃さ(心の外)だ」と、いずれも涙が心の受け身的な現象でなく、主体的な役割を担っている。また「知る」という動詞が共通して用いられている点興味深い。いずれにせよ、心の内と外の間に涙の様々なるまいを介在さ

することにより、より繊細な心の様相の表現を可能にしていると言えよう[14]。

4.3 心の実体化の変遷

心の実体化には二つの方向が考えられる。一つは複数の心（例えば、今的心と過去の心、他者の心と自分の心）を対比させて表現する方向、もう一つは、心を他のもの、例えば身と対比させて表現する方向であり、両者とも『古今和歌集』にすでにそれらの用例が見られた（3.3）。

前者では、『後撰和歌集』に、「同じ心」の用例が特に多く（5首）見られた（古今1例、541、拾遺2例、787、820、千載1例、1223、新古今2例、773、1143のみ）。

つらからば同じ心につらからんつれなき人を恋ひむとも
せず

（後撰、592）

はかなくて同じ心になりにしを思うがごとは思らんやぞ
（後撰、594）

わびしさを同じ心と聞くからにわが身を捨てて君ぞかな
しき

（後撰、595）

ひとりのみ思へば苦し如何にして同じ心を人に教へむ
（後撰、602）

思ひつつまだ言ひそめぬ我が恋を同じ心に知らせてし哉
（後撰、1012）

いずれも恋部にあり、あなたを思う私の心と私を思うあなたの心を対比的に表現している。

心は本来一つであるはずなのに、それを分割させ、様々な思いを対立させて心の様相を表現する試みが見られた。

いかでかく心ひとつをふたしへにうくもつらくもなして
見すらん

（後撰、555）

うれしきもうきも心はひとつにてわかれぬ物は涙なりけ
り

（後撰、1188）

うしと思ふ物から人の恋しきはいづこを懨ぶ心なるらん
（拾遺、731）

かくばかり憂しと思ふに恋しきは我さへ心二つありけり
（拾遺、989）

後撰555歌、同1188歌では、「心ひとつ」と認識しているが、恋する心（うれしき心）と憂しと思う心に分裂させ、対立させている。さらに『拾遺和歌集』でも同様に、731歌と989歌で、恋しいと思う心と憂しと思う心を対比させている。後者では、結局分裂した心を自分の中に「心二つあり」と認識するに至っている。

単に「恋しい」と「憂し」と二つに分裂した心の葛藤だけでなく、様々な分割した心の対立を用い複雑な気持ちや思いの葛藤を表現する用例も見られた。

降らぬ夜の心を知らで大空の雨をつらしと思ひける哉
（拾遺、797）

陸奥の思ひしのぶにありながら心にかかるあふの松原
(金葉、429)

思はじと思へばいとどこひしきはいづちか我が心なるら
ん

(詞花、204)

拾遺797歌で、「雨の降ったときの心と降っていないときの心」が、金葉429歌では、「逢わずに忍ぶ心と会いたいと期待する心」が、詞花204歌は、「恋する心と恋すまいと思う心」が表現されている。最後の歌では、まさに「いづちか我が心なるらん」と心の葛藤そのものが言葉に現れている。

心の実体化のもう一つの方向、心と身の対比による表現について述べる。『古今和歌集』では、ただ単に心が身から遊離するのみならず、心が離れた身の方に着目したり、さらに心と身の関係性を越えた主体の参入があつたりして、心のふるまいがより深く探求され、その表現が模索されていった。『古今和歌集』以降の集においても、身から遊離する心よりも、むしろ身の方へ叙述が焦点化される和歌が多くあった。

春の野に心をだにもやらぬ身は若菜はつまで年をこそつ
め

(後撰、9)

思いやる心にたぐふ身なりせば一日に千度君は見てまし
（後撰、678）

身は早くなき物のごと成りにしを消えせぬ物は心なりけ
り

(後撰、1213)

人知れず思ふ心を留めつづいくたび君が宿を過ぐらん
（拾遺、687）

明けぐれの空にぞ我は惑ひぬる思ふ心の行かぬ間に間に
（拾遺、736）

道とはみ行きては見ねど桜花心をやりて今日はくらしつ
（後拾遺、97）

わかれゆく舟は綱手にまかすれど心は君がかたにこそひ
け

(後拾遺、1077)

恋ひわぶる心は空に浮きぬれど涙の底に身は沈む哉
（千載、947）

心こそあくがれにけれ秋の夜の夜ぶかき月をひとりみし
より

(新古今、406)

「（身は）年を積む」（後撰、9）、「もし心から離れないなら何度もあなたに会うことができる」（後撰、678）、「身がなき物のようになってしまっている」（後撰、1213）、「あなたの宿の前をたびたび通ったり」（拾遺、687）、「道に迷ったり」（拾遺、736）、「今日はくらしつ」（後拾遺、97）、「（身は）舟のゆく方向に任せる」（後拾遺、1077）、「身は涙の底に沈む」（千載、947）、「（身は）ひとりで月を見る」（新古今、406）と、いずれにおいても離れてしまった心よりも残された身の方に焦点化されていると言えよう。

また身と心との関係に、『千載和歌集』と『新古今和歌

集』では、新たな模索がなされていた。

琴の音に通ひそめぬる心かな松ふく風にあらぬ身なれど
(千載, 676)

いとはるる身を憂じてや心さへ我を離れて君に添ふら
ん
(千載, 830)

数ならで心に身をばまかせねど身にしたがふは心なりけ
り
(千載, 1096)

そむきてもなを憂きものは世なりけり身を離れたる心な
らねば
(新古今, 1752)

千載676歌は、「琴の音と松風が似通うというけれど、自分の身は松風ではないが、琴の音に心が引かれる」と、身と心が必ずしも対立していない内容である。同830歌の内容は、「あなたから厭われる身が嫌で、心も自分から離れてあなたに添う」と、心と身が共に離れている様子を表現している。また同1096歌は、「数ならぬ身なので、心の思い通りに生きることはできないけれど（心の葛藤あり）、心は自分からこの身の境遇に流されてしまっている（心の葛藤なし）」との内容で、いわば葛藤そのものを放棄していると考えられよう。新古今1752歌も複雑な心の葛藤を叙述している。内容は、「身は世を捨てたのに、心は世を捨てきれない（身と心の対立）が、心は身から離れることはできない（心と身の一致）ゆえに、心も身も世に執着してしまう」である。

さらに次に挙げる和歌は、身と心の他に「我」（主体）が導入され、これら三者の複雑な関係性が表現されている。

花に染む心のいかで残りけん捨てはててきと思う我が身
に
(千載, 1066)

極楽へまだわが心ゆきつかずひつじのあゆみしばしとど
まれ
(新古今, 1933)

月のゆく山に心をおくり入れてやみなるあと身をいか
にせん
(新古今, 1781)

おろかなる心の引くにまかせてもさてさはいかにつみの
思いは
(新古今, 1749)

千載1066歌の内容は、「出家して身も心も捨てたはずなのに、花に執着する心はどうして残ったのか」で、統御できない心の葛藤を内省的に自問している。新古今1933歌は、「心は極楽へまだ到達していないが、身は着々と死に向かっている」と述べ「ひつじのあゆみしばしとどまれ」と主体を導入し、心と身の乖離を解決しようとしている。同1781歌は、「心の方は、月のゆく山を慕ってそこに送り込んだとしても、残った闇の身をどうしたらいいのか」と、心はよしとしても、身（社会的な存在も含め）へと焦点化して、主体による自問が吐露されている。同1749歌は、「身を心に任して思うままに生きたとして、最後の瞬間、どんなふうに思うだろうか（後悔はないのか）」との内容で、心の葛藤から抜け出ることはできないのではと主

体が自問している。

以上、身と心が対立せず一致していたり、身との関係で複数の互いに葛藤する心が表現されたり、身と心を統合する主体が導入され、自問による解決が試みられたりなど、身と心と主体の複雑な関係性が表現されていた。主体は心の一部である。自問する主体としての心と身と関係づけられる客体としての心と、心の階層性が表現され、そこに心を捉える新たな試みがなされていると見ることができよう。

5. おわりに

本研究は、『古今和歌集』仮名序「人の心を種として」を出発点として、「こころ」の表現とそこに底在する心の構築について検討することを目的とした。さらに古今集以降の八代集を対象に、それらの表現がどのように変遷していくのか、心の捉え方がどのように変化していくのかを検討した。

心の空間化では、「心の隅」、「心の底」など、単に心を空間として表すにとどまらず、その空間の中で生じている情景を具体的に表現したり、心の内と外を対比的に表現したりする試みがなされていた。また古今集以降、心の内と外の間に「涙」を指定し、涙の歌語化と相まって、心の様相を様々に表現する試みがなされた。心の実体化では、心をモノとして捉える表現から、「身」への着目、複数の心や心の分割による対比、心の葛藤への着目、主体など第三の視点の導入など新たな表現の模索が蓄積されていた。

唐木順三は、『万葉集』から『古今和歌集』への流れの中で、「見ゆ」から「思ふ」へと主要な表現形式の中心が移り、その背景には「身体の眼」から「心の眼」への変化があるとした[15]。さらに下西風澄は、この「心の眼」による現実の再構成を可能世界と現実の二重化として捉え、前者で表現される世界が、『古今和歌集』以降、心の果たす役割の拡張を通して展開してきたとした[16]。本研究で得られた「こころ」の表現とその変遷に関する分析結果は、まさにこの「心の眼」を通した和歌的世界の構築と展開の一端を示すものと位置づけられよう。

現実世界から離れた心の世界は、まず外に対する内の世界が様々に構築され、心が様々に分割されたり、涙や主体が導入されたりすることにより、より複雑な心の様相が和歌の言葉に移し替えられる。和歌史的には、時間軸の導入により、物語的な世界が叙述されるようになったり、心の葛藤の解決に向け主体により自問されたりするなど、心の世界への認識の深化と思われるような事象が様々に見られた。これらの考察により和歌の世界のより深い理解が達成されよう。ただ本研究での表現の変遷による検討は、勅撰集の用例に限られており、今後、私家集も含めたより広範囲な和歌資料を加えた検討が必要であろう。

注

- [1] 片桐洋一『古今和歌集全評釈(上)(中)(下)』講談社学術文庫, 2019年
- [2] 藤平春男校注『詠歌大概』(日本古典文学全集, 歌論書, 小学館, 1975年)
- [3] 神田洋「古今集にみる古代の「こころ」」福田晃古稀記念論集刊行委員会編『伝承文化の展望』279 - 292頁, 2003年
- [4] 樺沢綾「歌語『心のすゑ』」『武庫川国文』78巻, 45 - 58頁, 2014年11月
- [5] 佐藤雅代「歌ことばとしての『心の闇』」『山陽論叢』25巻, 274 - 286頁, 2019年8月
- [6] 高木和子「古今集の「身」と「世」」『古今和歌集研究集成』2巻, 205 - 240頁, 2004年
- [7] 野村精一「紫式部とその自然」『日本文学』21巻, 84 - 95頁, 1972年10月
- [8] 板野みづえ「新古今時代の和歌における〔身〕」『国語と国文学』99巻, 20 - 35頁, 2022年1月
- [9] 半沢幹一「古代和歌における「こころ」の空間化表現」『国語学研究』34巻, 56 - 64頁, 1995年3月, 「古代和歌における「身」と「心」」『文芸研究』145巻, 1 - 11頁, 1998年3月。いずれの論文も, 『古代歌喩表現史』(笠間書院, 2022年)に収録されている。
- [10] ツベタナ・クリステワ『涙の詩学—王朝文化の詩的言語』名古屋大学出版会, 2001年。『古今和歌集』から『新古今和歌集』にいたる八代集を通して, 歌語「袖の涙」を取り上げ, その表現(関連表現を含め)がどのように変遷しているか, 「詩的言語化過程」として, 意味生成・展開過程を明らかにしている。本研究の和歌史的な分析の枠組みとして参考にした。
- [11] 質的な分析手法として, 佐藤郁哉による『フィールドワーク』(新曜社, 1992年)や『質的データ分析法』(新曜社, 2008年)を参考にした。
- [12] 認知言語学では, 比喩表現が単なる修辞法にとどまらず, 人間の認識の基盤的な役割を担っていると主張する。本論文では, この主張に基づき, ジョージ・レイコフ『認知意味論』(紀伊国屋書店, 1993年)を参照している。
- [13] 『後撰和歌集』(片桐洋一校注, 新日本古典文学大系6), 岩波書店, 1990年, 『拾遺和歌集』(小町谷昭彦校注, 新日本古典文学大系7), 岩波書店, 1990年, 『後拾遺和歌集』(久保田淳, 平田喜信校注, 新日本古典文学大系8) 岩波書店, 1994年, 『金葉和歌集 詞花和歌集』(川村晃生, 柏木由夫, 工藤重矩校注, 新日本古典文学大系9) 岩波書店, 1989年, 『千載和歌集』(片野達郎, 松野陽一校注, 新日本古典文学大系10) 岩波書店, 1993年, 『新古今和歌集』(田中裕, 赤瀬信吾校注, 新日本古典文学大系11) 岩波書店, 1992年
- [14] (前掲) ツベタナ・クリステワ『涙の詩学』。「袖の涙」

の詩的言語過程の中で, 「涙」が心に直結し, 「袖」が心の外を表象していると述べている。

- [15] 唐木順三『日本人の心の歴史』筑摩書房, 1976年。『万葉集』では「見ゆ」という言葉が多く使われているが, 『古今和歌集』になって「見ゆ」が激減し, 代わりに「思ふ」の使用頻度が多くなったと指摘し, この背景に, 日本人の意識の変化, すなわち, 見ることで存在を確かめることから心に思うことを重視する意識の変化があると述べている。
- [16] 下西風澄『生成と消滅の精神史』文芸春秋社, 2022年, 「『万葉集』から『古今和歌集』へ—言葉から心へ」(315 - 341頁)。唐木順三の論考をもとに, 古今集になって, 身体の眼でなく, 心の眼を通して現実を再構成し, 和歌表現するようになったと述べている。